

Title	筑前須玖史前遺跡の研究(京都帝國大學文學部考古學研究報告第十一冊)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.173(529)- 174(530)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、極東典禮の研究者に資するものであらう。いつもながら巨費を投ぜられて半島文化を中外に宣傳しつゝある當路者に深き感謝の意を表せねばならぬ。(松本信廣)

筑前須玖史前遺跡の研究

(京都帝國大學文學部
考古學研究報告第十一冊)

第十冊「出雲上代玉作の研究」の出版後濱田博士梅原末治氏の外遊により暫く中絶した京都帝大考古學研究報告は、今回其第十一冊として鳥田貞彦氏の「筑前須玖先史時代遺跡の研究」を上梓した。著者が、昭和四年九月上旬同處に於て、甕棺十一箇さ其中に副葬せる細形銅劍一口を發見せし發掘調査の結果を録したものである。遺跡は、福岡市東南約二里、雜餉隈の西方約十町に位置する。發掘約八日にわたり、四地點を調査した。發見された石器の數は、比較的乏しく、土器は、彌生式に屬し、何れも壺、坏、甕、高坏の口縁部及び底部の破片であり、完全なるは當の合口甕棺だけである。これは砂を多く交えた粘土を用ひ、多くは良く平均に焼成せられて、鮮な赭色を呈し、不充分なる焼成の箇所が時に淡褐色を示してをる。陶車を使用せることは、器形の整正なること、器の内壁に上下に並行した階段狀の凸凹の遺存することによつて知られる。甕棺より發見された銅劍は、全長一尺一寸、莖は短くして長八分五厘、中央において折れてをる。手法精巧にして支那よりの輸入品らしい。その外鑑鏡破片數箇(四片の周縁部さ清白鏡、星雲鏡の紋様を残すもの二個)、並びに角製管玉を發見した。

須玖及附近の遺跡は既に古くより學界の注意を惹いてをる。著者は、次に既發見の關係遺物さ遺跡について述べ、ついで他地方甕棺關係遺跡さ遺物について語り、殊に文政五年の發見に係る筑前國糸島郡三雲村遺跡については、青柳禮信著「筑前國怡土郡郡三雲村古器圖考」を卷末に複製附載してをる。最後に、この甕棺の一般的特徴について語り、その三十度前後の斜位を以て埋葬せられしは伸展葬の意味にも叶ひ、甕の耐久にも都合よくしたものと考へられるさ斷じ、上下兩甕略ぼ同大同形なるもの先づ存して、ついで、上甕著しく小形にして蓋の形式をなすもの發生せしならんさ説き、伴出鑑鏡の年代より合口甕棺の年代漢代の而かも遅からざる時代に屬することを推定し、これが、金石併用期のものであり、其時期は、他の遺跡に於ける王莽の貨泉の發見により西紀一世紀に置くべきであるさ論ぜられてをる。次に甕棺さ件ふ銅劍銅鉾が組合箱式石棺よりも出土することに叙及され、たゞこの銅武器が後者にあつては細形のものに限らず廣形平形のものをも出すので、この型の石棺は、甕棺につぎて流行したるならんさ論じ、甕棺使用はその遺跡より神獸鏡の類の鑑鏡を全く出さない處から三國時代には衰亡せしならんさ述べ、要するに合口甕棺なるものは我が金石併用期に於ける彌生式土器なる製陶術の輸入さ共に地方的に發生した一個の特殊の葬法であり、その行はれたる地方は我が西陲大陸文化の最も容易に浸潤すべき自然的な地方であり、畢竟周末漢初に於ける支那文化東漸の結果西日本に波及した漢文化の影響の一端を示現するものに外ならぬさ結んでをる。

附載論文として梅原末治氏著「須玖岡本發見の古鏡に就いて」に

古鏡學者としての同氏の蘊蓄が傾けられ、破片は一々復原され、本遺跡出土鏡が、前漢代のものであり、所謂秦鏡と朝鮮樂浪古墳出土品鏡との中間に位ひすることが論證されてをる。

本報告が最近考古學界の注目すべき業績の一つであり、極東古代文化史の研究に一大光明を投ずるものであることは、吾人の喟喟を要せぬ。甕棺が、沈約の云ふ如く東夷の風俗であるか、または上代支那人の古俗にして、日本のそれはその影響を認むべきや或ひはまた著者の如く甕棺の日本に於ける独自の發達を認むべきや、本研究は更に第二第三の調査研究を促して止まぬ。もし隣邦支那に於て今少し山東その他海濱地方の先史遺跡を學術的に踏査して古代の住民淮夷徐夷萊夷等の風俗を闡明してくれたならば、日本甕棺の歴史にもまた新たな光明が齎されることであらう。東亞考古學界の舞臺は廣大である。吾人は京大考古學教室の將來の活躍を祈り、かゝる有益なる報告書の今後陸續現はれんことを期待する。(松本信廣)

青丘學叢 第一號 (青丘學會發行)

最近さみに活躍せる京城大學並びに朝鮮史編輯會の學徒の機關雜誌である。卷頭に小田省吾氏の「李朝の朋黨を略叙して天主教迫害に及ぶ」を掲載してをる。李朝の朋黨の争ひが朝鮮史の研究のため必要缺くべからずしかもその難解なることは世人の知る所、著者は、黨争の歴史を略叙し、末期に發生した時派と僻派の争ひが、天主教の迫害をまき起せることを京城のフランス天主教會司

教ミューテル師が発見せる黃岫永の帛書に基いて論證されてをる。次に小倉進平氏の「狐を意味する朝鮮方言」は、ジリエロンの研究法にならひ新分野を開拓せる方言學上の好論文、山口正之氏の「朝鮮基督教史料」(己亥日記)は、同じくミューテル氏の校訂出版せる玄錫文著、己亥の大迫害に殉教せし七十八名の殉教日記を紹介せしもの、日本のキリシタン研究熱が半島の學界に刺激し、ながらく等閑に附せられた朝鮮キリスト教史研究の勃興したことは悦ぶべき現象である。申爽鎬の「屏虎是非に就いて(上)」は、これもまた朝鮮の末期嶺南の儒林界を二分して争はれし一大黨論屏虎是非について述ぶ。末松保和氏の「太平御覽に引かれた倭國に關する魏志の文に就て」は御覽の引いた魏志は現行本とは獨立した別系統の魏志ではないかと疑つてをる。中村榮孝氏「朝鮮經濟史雜考」は、「竇」が元本据置きでその利息を取り、何等かの目的に使用する制度であつたことを考へ、同氏の「滿鮮關係の新史料」は羅振玉所藏太宗推戴に關して外藩各蒙古貝勒の朝鮮國王に送りし書、二、第二回朝鮮征伐の理由を宣せし清太宗告祭文の草稿、三、清太宗の征鮮の陣中にあり南漢山に籠城中の仁祖に與へた詔諭を紹介し、東洋史學に多大の貢獻をなしてをる。卷末に資料欄あり明清代に朝鮮より支那に派遣せられしものの紀行詩文集の目錄「事大紀行目錄」を收め、その一つ陽谷赴京日記の原文を附載してをる。半島文化の研究のため重要な使命を帯びたる本雜誌が將來健全なる發達をなさんことを祈る——年四回會費三圓發行所京城府本町一丁目大阪屋號書店——(松本信廣)